一茶における雪月花

黄　色　瑞　華

《Summary》

Issa's View on Snow, the Moon and Flowers (*Setsugekka*)

Zuike Ohshiki*

It is widely known that in Japanese literature, especially in poetry, snow in winter, the moon in autumn, and flowers (cherry blossoms) in spring represent natural beauty. These three have, therefore, often been used to refer to natural beauty.

Snow has made human life difficult since ancient times. However, traditional poetry was born when snow was concidered something to enjoy seeing just like the moon and flowers. It cannot be denied that this was due to the influence from old Chinese poetry.

However, those who could regard the three objects of beauty were limited to people in special situations of special areas. In considering nature as a topic of Japanese poetry, attention should be paid to people who lived different lives from those of the poets of *Kokinshu* and *Gosenshu*.

It is our duty as scholars of Japanese culture to exclude the idea that the Japanese sense of nature is that of such poets and consider the Japanese sense of beauty in much broader perspective.

---

* 城西大学教授・主任研究員

1

日本の文学，特に詩歌系文学において，冬の雪，秋の月，春の花が自然美の代表的題材とされていることは言うまでもない。そのためにこの3語を並べて，しばしば自然美の総称としても用いられてきた。

今，便宜的に集英社版『大蔵時記』[1] から「雪」の歌を引いてみる。

我が里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくはのち　天武天皇〔万葉集〕
降る雪はあはにな降りそ吉隠(よなばり)の猪養の岡の寒くあらまくに　穂積皇子〔万葉集〕
沫(あは)雪のほどろほどろに降りしけば奈良の都し思ほゆるかも　大伴旅人〔万葉集〕
我が背子とふたり見ませばいくばくかこの降る雪の嬉しくあらまし　光明皇后〔万葉集〕
あしひきの山道も知らず白橿(しらかし)の枝もとををに雪の降れれば　〔万葉集〕
忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは　在原業平〔古今集〕
冬ながら空より花の散りくるは雪のあなたは春にやあらむ　清原深養父〔古今集〕
あさぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里に降れる白雪　坂上是則〔古今集〕
降る雪は消えでしばしもとまらなん花ももみぢも枝になきころ　よみ人しらず〔後撰集〕
山里は雪降りつみて道もなしけふ来む人をあはれとは見む　平　兼盛〔拾遺集〕
雪ふかき道にぞしるき山里はわれよりさきに人来ざりけり　藤原経衡〔後拾遺集〕
雪ふかき峰のあさけのいかならん真木の戸しらむ雪の光に　藤原良経〔新後撰集〕
駒とめて袖うち払ふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮　藤原定家〔新古今集〕
夕されば潮風さむし波間より見ゆる小島に雪はふりつつ　源　実朝
かつ消ゆる軒のしづくも夕暮はまた音たえてこほる雪かな　公　順
白妙のゆふつけ鳥のうづもれて明くる梢の雪に鳴くなり　頓　阿
雲ふかみ日はかげろひて朝戸出の軒端の山に雪ぞかかやく　後花園院
渡りかね雪も夕をなほたどる跡なき雪の峰のかけはし　正　徹
橋立の椋橋(くらはし)山に雲霧(き)らひ高市国原雪ふりにけり　賀茂真淵
山陰のねぐらを出づる朝鳥の羽ぶきにこぼす木々の白雪　小沢蘆庵
ふたりとはまだ人も見ず雪しづれ朝日におつる杉の下道　橘　曙覧

ついでに，同書があげた発句も引いておく。

黄色瑞華

ふる雪は京おしろいとみやこかな	重　頼
さればこそ夜着重ねしか今朝の雪	信　徳
長々と横たふ雪の堤かな	才　麿
酒飲めばいとど寝られぬ夜の雪	芭　蕉
我が雪とおもへばかろし笠の上	其　角
応々といへど敲くや雪の門	去　来
狼の声そろふなり雪の暮	丈　草
ながながと川一筋や雪の原	凡　兆
行燈の煤けぞ寒き雪の暮	越　人
馬の屋に雪の花ちる山路かな	支　考
夜の雪晴れて藪木のひかりかな	浪　化
蠟燭(らふそく)のうすき匂ひや窓の雪	惟　然
ともしびを見れば風あり夜の雪	蓼　太
うつくしき日和になりぬ雪の上	太　祇
宿かさぬ燈影(ほかげ)や雪の家つづき	蕪　村
ところどころ雪の中より夕けぶり	闌　更
鮮(あざらけ)き魚拾ひけり雪の中	几　董
客去つて寺しづかなり夜の雪	召　波
見もしらぬ人にものいふ門の雪	白　雄
暮の雪水にもつもるけしきかな	青　蘿
さくさくと藁喰ふ馬や夜の雪	大江丸
濡雪(ぬれゆき)の瞼(まぶた)に重し戻り馬	五　明
青天に雪の遠山見えにけり	成　美
これがまあつひの栖(すみか)か雪五尺	一　茶

雪は人間にとって，その生活において酷なるもの，厳しいものである。このことは昔も今も変わらない。それを，花や月のように美しいものと見て楽しむとき伝統の詩歌は生まれた。その精神史的背景には古代中国詩の世界があったことも否定できない。たが，それを美しいものとして楽しんだ人は，特定の地域の，特定の立場にあった人に限られていたはずだ。民族的スケールで，日本の詩歌，特にその自然観を考えるためには，上に引用した多くの歌人・俳人とは異った地域や環境で生きた人々の存在を軽視することはできない。

2

沓芳しき楚地の雪といひ，木ごとに花ぞ咲にけるなどゝほんさうめさるゝハ，銭金程きたなきものはあらじと，手にさへふれざる雲の上人のことにして，雲の下の又其下の，下々の下国の信濃もしなの，おくしなのゝ片すミ，黒姫山の梺なるおのれ住る里ハ，木の葉はらはらと，峰のあらしの音ばかりして淋しく，人目も草もかれはてゝ，霜降月の始より，白いものがちらちらすれば，悪いものが降る，寒いものが降ると口々にのゝしりて，

初雪をいまいましいといふべ哉　　旅　人

三尺も積りぬれば，牛馬のゆきゝハばたりと止りて，雪車のはや緒の手ばやくとしもくれは鳥，あやしき菰ニて家の四方をくるみ廻せば，忽常闇の世界とはなれりけり。昼も灯ニて糸くり縄なひ，老たるハ日夜ほた火ニかぢりつくからに，手足はけぶり黒ミ，髭は尖り，目ハ光りて，さながらあすらの躰相にひとしく，餓兒したるもの貫ひ，蚤とりまなこの掛乞のたぐひ，わらぢながらいろりにふミ込ミ，金ハ歯ニあてゝ真偽をさとり，葱ハ竈に植りて青葉を吹く。都て暖国のてぶりとはことかはりて，さらに化物小屋のありさま也けり。

羽生へて銭がとぶ也としの暮

文政3年12月28日付，春甫・掬斗・素鏡・雲士宛書簡に添えられた「俳諧寺記」(2)（原題）の全文である。

「沓芳しき楚地の雪」は，『詩人玉屑』の宋の天望年間，閔の僧可士が僧を送る詩の「一鉢即チ生涯　緑ニ隨テ歳華ヲ度ル　是山皆寺有り　何処家ト為サズ　笠ハ重シ呉天の雪　鞋ハ香シ楚地ノ花」(3) をさす。「木ごとに花ぞ咲にける」は，『古今集』の「雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」（紀友則）をさす。

時代の子であった一茶が，それまでの観念的・通俗的な俳諧を批判し，生活実感を重んじた新しい俳諧を主張して『我春集』の序を書いたのは文化7年（1810），翌春には「月花や四十九年のむだ歩き」「花の月のとちんぷんかんのうき世哉」と自嘲した。

はつ雪を敵のやうにそしる哉　　（七番日記　文化10）

はつ雪やといへば直に三四尺　　（　　同　　）

雪ちるやおどけも云へぬ信濃空　（八番日記　文政2）
衽形(えりなり)に吹込(ふきこむ)雪や枕元　（八番日記　文政3）
しなのぢや意地にかゝつて雪の降(ふる)　（八番日記　文政4）
早々と来ず共(とも)よいを門の雪　（　同　）
とく止(やめ)よはつ雪はつ雪といふうちに　（文政句帳　文政5）
大雪やせつぱつまりし人の声　（文政句帳　文政6）

いずれも観念を超え，生活実感に則した作品である。「初雪を敵のようにそしる」のは，「直に三四尺」も降り積ることを経験的に知っているからであり，「大雪」に「せつぱつまりし人の声」が聞えてくるからである。だから，

はつ雪やなどゝ世にある人のいふ　（文政句帳　文政5）

とも言いたくなるのである。「世にある人」とは，「沓芳しき楚地の雪といひ，木ごとに花ぞ咲にけるなど奔走めさるゝ」「雲の上人」のことであり，それはわが国伝統詩歌史上の人々である。

また，こうした確かな生活実感を解してこそ，

はつ雪や何〔の〕因果に樽ひろひ　（文政句帳　文政5）
鍋の尻ほしておく也雪の上　（七番日記　文化14）

のような句を評しうる。初雪に手をまっ赤にして，得意先の空樽を回収してあるく少年，その境涯や胸中は，雲の上人でなくても，豪雪と闘った者でなければ握みにくい。春近い日，久々の上天気に煤だらけの鍋を洗い，積っている雪の上に尻を上にして干してある。雪に反射した陽光，その明るい輝きに美しさを発見するのも，観念を超えた世界である。

3

万葉の赤人の歌，子規が唱導した客観写生の句歌などはともかく，作品と作家自身の生活そのものを切り離して考えることはむずかしい。

前に引いた『大歳時記』は，一茶の句の中から「是がまあつひの栖か雪五尺」をあげている。この句，『七番日記』の文化9年12月の条に収めてあり，やっとの思いで「つひの栖」にたどり着いた安堵の気持ちを詠んだと解す注もある。

父没後，12年もの間，その遺産分配を要求して郷里の柏原に足をはこび続けた一茶が，最後の交渉を目前にした文化9年（1812，一茶50歳）11月24日，雪の古郷にたどりついたときの感慨である。それは長年の憎悪と闘争の中で，人生の峠を越え，心身ともに疲れきった沈痛な感慨である。極限に近い疲労の堆積の中から発せられた虚無と嗟嘆の声と解すべきである。

一茶の老軀にむち打って，12年もの間，柏原に足をはこばせ続けたものは何であったか。そして，何が彼をそこまで追い込んだのか。諸説，尽きることを知らぬ状況だけが，根源的な大事は，彼を育んだ山河のある，母の胸に幼き日の夢を結んだ，そして今は父母の眠る地，それに対するノスタルジアと，開拓農民の血を引く百姓弥太郎の土に対する執着であった[4]。そして，この長年の闘争は，この時代の，この階層の者が歩まなければならない宿命的な道程でもあった。

「初夢に古郷をみて涙哉」（寛政6）と詠ずる彼の魂の哀切なノスタルジアは，

外は雪内は煤（すす）ふる栖かな　（寛政句帳　寛政4）
初雪や古郷見ゆる壁の穴　（文化句帳　文化1）
古郷の袖引（そでひく）雪が降（ふり）にけり　（文化5，6年句日記　文化6）

などの句を生み出した。外はしんしんと雪がふりしきる豪雪下にあっても，「煤ふる」囲炉裏を囲むだんらんの我が家があったのだ。

雪の日や古郷人もぶあしらひ　（文化句帳　文化4）
心からしなのゝ雪に降られけり　（　同　）

文化4年11月5日，一茶はこの年2度めの帰郷をした。7月20日に帰郷して，10月8日に江戸にもどった彼は，同月27日「国に行かんとして心すゝまず，本郷の先より王子かぎ屋に休む。」（文化句帳）と，途中から引き返し，29日改めて江戸を後にした。柏原到着は10月5日，「雪の日や古郷人もぶあしらひ」の句はこの日の条に記してある。江戸を立つ前に「国に行かんとして心すゝまず」と記した，その予想どおり異母弟との交渉は難行したのだった。同月12日「心からしなのゝ雪に降られけり」の一句を残して江戸へ向っている。

4

「月」の歌も『大歳時記』から引いてみる。

月読の先に来ませあしひきの山を隔りて遠からなくに　湯原王〔万葉集〕
春日にある御笠の山に月の舟出づ風流士の飲む酒杯に影は見えつつ　〔万葉集〕
倉橋の山高みか夜隠りに出で来る月の片待ちかき　沙弥女王〔万葉集〕
木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり　よみ人しらず〔古今集〕
月見れば千々に物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど　大江千里〔古今集〕
わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て　よみ人しらず〔古今集〕
すだきけん昔の人もなき宿にただ影するは秋の世の月　恵　慶〔後拾遺集〕
秋の夜の月に心のあくがれて雲居に物を思ふころかな　花山院〔詞花集〕
いにしへの難波のことを思ひ出でて高津の宮に月のすむらん　源　師頼〔金葉集〕
秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ　藤原顕輔〔新古今集〕
山の端に出づるも入るも秋の月うれしくつらき人の心か　西　行
天の原思へばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ　藤原定家
雲消ゆる千里のほかに空さえて月よりうづむ秋の白雪　藤原良経
思ふことをなど問ふ人のなかるらむあふげば空に月ぞさやけき　慈　円〔新古今集〕
鳰の海や月のひかりのうつろへば浪の花にも秋は見えけり　藤原家隆〔新古今集〕
秋の露や袂にいたくむすぶらん長き夜あかずやどる月かな　後鳥羽院〔新古今集〕
霧はるる雲間に月は影見えてなほ降りすさぶ秋の村雨　藤原為顕〔玉葉集〕
吹き分くる竹のあなたに月見えて籬はくらき秋風の音　祝子内親王〔風雅集〕
秋の行く心もさぞな薄ちる枯野の上にほそき月影　心　敬
これにます都のつとはなきものをいざと言はばや姨捨の月　宗良親王
大舟に小舟引き添へます鏡隅田河原に月を見るかな　賀茂真淵
真帆引きて寄せくる舟に月照れりたのしくあらむその舟人は　田安宗武
甍朽ち帳破れてみ仏のみ影あらはに月ぞさしいる　小沢蘆庵
行く水の末はさやかにあらはれて河上くらき月の影かな　香川景樹

同様に発句も引いておく。

浮世の月見過しけり末二年　西鶴
椴(とど)の木のすんと立たる月夜かな　鬼貫
秋もはやばらつく雨に月の形(なり)　芭蕉
声かれて猿の歯白し峰の月　其角
満ち欠くる月になみだぞ須磨の秋　玄来
京築紫去年(こぞ)の月とふ僧仲間　文草
露降るや蜘(くも)の巣曲(ゆが)む軒の月　曽良
山寺に米つくほどの月夜かな　越人
月清し水より立ちて五位の声　野坡
網打ちの肱(ひじ)なげちらす月夜かな　朱拙
月天心貧しき町を通りけり　蕪村
海原や日の及ばぬを月の隅(くま)　蘭更
風かなし夜々に衰ふ月の形　暁台
二人見し月を涙のかたみかな　樗良
浅河や月をよけ行く歩(かち)わたり　几董
追風や夜すがら月の走りぶね　大魯
秋の月瓦に見るは露草か　白雄
ふはとぬぐ羽織も月のひかりかな　成美
あの月をとつてくれろと泣く子かな　一茶

『日本書紀』神代巻の「一書」の月読(つくよみ)尊についての記述をみると，原始時代において，「月」は畏怖の対象だったことが察しられる。また，『竹取物語』や『源氏物語』でも「月の顔を見ることは忌むべきこと」と言う。また，『万葉集』で，「月読壮子(つくよみをとこ)」(990, 1376)，「月人(つきひと)壮子」(2014, 2227 など）などの文字をあてているのは，「月」にたくましい男性のイメージがあったことを示すものである。そしてまた，「春日山なべててらせるこの月は妹が庭にもさやけかりけり」(万葉集，巻 7・1078）と妻問(つまどい)の夜道を照し，あるいは「月夜よし河音清しいざここに行くも行かぬも遊びて帰(ゆ)かむ」(万葉集，巻 1・574）のように夜遊びの背景にもなった。

平安時代に入って，仲秋の名月を賞して詩歌の宴を催す風が育ち，これは宮中にも入って「月の宴」が年中行事として定着することになった。引用の『大歳時記』があげる歌ののの中にもみられるように，月は次第に「もの思う」の媒体という一面を持つようになる。

これには中国詩，特に『白氏文集』や『和歌朗詠集』などによる白楽天の影響が大きい。ちなみに，一茶の「古郷の留主居も一人月見哉」（八番日記，文政 2）は，『白氏文集』『和漢朗詠集』の「八月十五夜，独リ禁中ニ直シ月ニ対シテ元久ヲ憶フ」の詩句，「三五夜中新月ノ色　二千里ノ外故人ノ心」のパロディである。

「月」に対する心への仏教思想の影響も強く，『明恵上人歌集』は，その典型的な例と言ってよかろう。「あの月をとつてくれろと泣子哉」（七番日記，文化 10）を推敲して，わが子に対する期待とした「名月を取つてくれろとなく子哉」（おらが春）の「月」や「のゝさまと指(ゆびさし)た月出たりけり」の「月」には，真如の月を慕い求める童心がある。

5

「月」の句にも，一茶独自の世界がある。

出る月のかたは古郷の入江哉	（寛政紀行書込）
月今よひ古郷に似ざる山もなし	（　同　）
古郷に似たる山かぞへて月見哉	（　同　）
さらしなをうしろになせば月夜哉	（享和句帳　享和 3）
さらしなを放れし其(その)夜月夜哉	（　同　）
さらしなはきのふとなりて月夜哉	（　同　）
思ひなく古郷の月を見度(みたき)哉	（文化句帳補遺　文化 4）

月影に古郷をしのぶ，典型的な郷愁句である。これに対して，次のような句もある。

たまに来た古郷の月は曇りけり
たまに来し古郷も月のなかりけり
たまたまの古郷の月も涙哉

『文化句帳補遺』の文化 4 年 8 月 14 日の条に記された句々である。「たまに来た古郷の月は曇りけり」と嘆く「古郷の月」は，『寛政紀行』の書込みで，「月今よひ古郷に似ざる山もなし」「古郷に似たる山かぞへて月見哉」『享和句帳』で「さらしなをはなれしその夜月夜哉」と詠んだ，あの「古郷の月」である。

一茶がたまたま帰郷して，父の終焉に会ったのは享和元年（1801），そのとき遺産分配の遺言はあった。父の初七日の日，継母・異母弟と最初の交渉をし，具体的なことは本家の当主にまかせるということで，両者は合意した。

文化4年（1807）7月，父の七回忌法会が営まれた。一茶はこの時，父の没後はじめての帰郷をしている。父が亡くなって以来，毎年金1分を伝馬役金として問屋に納め，柏原の住民としての権利を確保していたから，その時も当然，遺産分配を迫ったものとみてよかろう。『文化句帳補遺』の7月20日の記事に，「外へ出れば，はゝきゞを分るがごとく，しる人の俤もうしなひ，内に入れば，茨の中にやどるやうにとがとがしく，さらに古郷のさまはなかりけり。」と記している。

6

伝統的な「花」の歌，これも『大歳時記』から引いてみる。

あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり　小野　老〔万葉集〕
含(ふふ)めりし花の初めに来し我や散りなむのちに都へ行かむ　大伴家持〔万葉集〕
年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし　藤原良房〔古今集〕
花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに　小野小町〔古今集〕
身にかへてあやなく花を惜しむかな生けらば後の春もこそあれ　藤原長能〔拾遺集〕
昨年(こぞ)見しに色もかはらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ　秦　兼方〔金葉集〕
木のもとを住みかとすればおのづから花見る人になりぬべきかな　花山院〔詞花集〕
おしなべて花の盛りになりにけり山の端ごとにかかる白雲　西　行〔千載集〕
おもかげに花のすがたを先だてていくへ越えきぬ峰の白雲　藤原俊成〔新勅撰集〕
明けわたる外山のさくら夜のほどに花さきぬらしかかる白雲　藤原為家〔続後撰集〕
のこりなく雨は晴れたる庭たづみなほ雲うづむ花の下かげ　正　徹
ともに見し人も今はなし故郷の花のさかりに誰をさそはむ　香川景樹
吉水の花のしづくにぬれぬれてはてはしらめる月の影かな　加納諸平

例のごとく，「花」の句も引いておく。

天も花に酔へるか雲の乱れ足　立　圃

黄色瑞華

やあしばらく花に対して鐘つく事　重頼
これはこれはとばかり花の吉野山　貞室
花の雲鐘は上野か浅草か　芭蕉
四方より花吹き入れて鳰(にほ)の海　芭蕉
肌のよき石に眠らん花の山　路通
花の香や嵯峨の灯火(ともしび)消ゆる時　蕪村
夕雨や花のあたりをうちかすみ　暁台
舟橋の勅使まうけや花の雲　召波
花とながめ桜とながめ日は暮れぬ　白雄
遠山の花に明るしうしろ窓　一茶

一般に，「花」と言えばただちに「桜花」を考えるが，『万葉集』においては，「梅花」の百余首に対して「桜花」はその二分の一にも満たない。これは「梅花」が大陸渡来の花として，渡来文化の象徴のように考えられていたからであった。そして，「桜花」が詩歌において花の代表的な存在となるのは，国風文化への自覚が高まった平安時代になってからである。

『伊勢物語』第82段，惟喬親王を囲む貴族たちの花の宴はよく知られているが，そこで観賞の対象となったのは，桜の花そのもの，つまり形や色や匂いではなく，花を付けた桜木全体である。桜は遠目はよいが，個々の花そのものは人の心を強く引くというほどのものではないからだ。「あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛なり」（小野老）と詠むとき，そこにたとえられた桜花，「山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけり」（紀貫之）の「山ざくら」，いずれも遠目の桜である。

そして，「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（紀友則），「わが宿のさくらなれども散る時は心にえこそまかせざりけれ」（花山院）と，短命の桜花に心を引かれ，「うつせみの世にも似たるか花ざくら咲くと見しまにかつ散りにけり」（よみ人しらず），「世の中を思へばなべて散る花のわが身をさてもいづちかもせむ」（西行）と，人の世の無常をそこに見つめたのだった。『徒然草』第137段にも，「花はさかりに，月はくまなきをのみ，見るものかは。」「咲きぬべきほどの梢，散りしをれたる庭などこそ，見どころ多けれ。歌の詞書にも『花にまかれりけるに，はやく散り過ぎにければ』とも，『さはる事ありこまからで』など書けるは，『花を見て』といへるに，劣れる事かは。」とある。

兼好は，「よき人は，ひとへに好けるさまにも見えず，興ずるさまも等閑(なほざり)なり。かたゐ

なかの人こそ，色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには，ねぢより立ちより，あからめもせずまもりて，酒のみ，連歌して，はては，大きなる枝，心なく折り取りぬ。」（徒然草，137段）と言った。「花のもとには，ねぢより立ちより」はともかく，「酒のみ」「連歌して」（詠歌して）は，前述の『伊勢物語』における貴族たちの花見からの習いであった。近世に入って，花見・花見の宴は庶民大衆の間に浸透し，詩歌の上でも明るい風狂の世界を作ることになった。

7

一茶の「花」の句，

高山や花見序（ついで）の寺参り	（寛政句帳　寛政6）
片脇に息をころして花見哉	（享和句帳　享和3）
奈良漬を丸でかぢ（じ）りて花の陰	（文化句帳　文化1）
花の陰隙ぬす人ぞたのもしき	（　同　　文化3）
花咲て妹がこんにやくはやる也	（　同　　文化4）
乞食（こつじき）も一曲あるか花の陰	（　同　　文化5）
ない袖を振て見せ見せ花見哉	（七番日記　文化15）
茶屋村の一夜に出来し花の山	（八番日記　文政2）
穀（ごく）つぶし桜の下にくらしけり	（文化句帳　文化3）
よるとしや桜のさくもこうるさき	（七番日記　文化7）
下々（しもじも）に生れて夜もさくら哉	（七番日記　文化8）
桜へと見えてじんじんばしより哉	（七番日記　文化15）
田楽のみそにくつつく桜哉	（八番日記　文政4）

近世庶民の行動文化としての花見である。「大名を馬からおろす桜哉」（文政7）と詠む，その桜を楽しむわが身を「下々に生れて夜もさくら哉」とよろこぶのだが，「高山や花見序の寺参り」「ない袖を振つて見せ見せ花見哉」と，世間を見る目はきびしい。

「田楽のみそにくつつく桜哉」，満開の花の下で広げた重箱の中の田楽に散った花弁が，くっついたというのである。それが美しいと言っているのではなく，そういう事実を見た

というのである。『七番日記』には，「傘（からかさ）にべたりべたりと桜哉」（文化 10）という句もある。『我春集』には，「黒土の草履のうらも梅の花」があり，これは「草履のうら」にくっついた梅の花弁である。観念的・通俗的俳諧を批判し，生活実感を重んじた新しい俳諧の試みであった。現実的事実を確かに描写することによって，その事実を告発するという時代や社会に対する批判の句もこうした試みの中から生み出されたのだった。「花」の句の中にも，

花見んと致せば下に下に哉　（八番日記　文政 4）

がある。

たゞ頼め花ははらはらあの通（とほり）　（文化五六年句日記　文化 6）
さく花や此世住居も今少（すこし）　（七番日記　文化 7）
さく花の中にうごめく衆生哉　（　同　文化 9）

御迎ひの雲を待身（まつみ）も桜哉　（文化句帳　文化 2）
死下手と又も見られん桜花　（文化五六年句日記　文化 5）
つかつかとちり恥かゝぬ桜哉　（文化句帳　文化 5）
死支度致せ致せと桜哉　（七番日記　文化 7）

これらの句は，短命の桜花に人の世の無常を見て，自身の生に対比したものである。かかる世界は伝統詩歌にも見られ，一茶句の特色を語る材にはなっても，独自性の証にはならない。

見かぎりし古郷の山の桜哉　（享和句帳　享和 3）
夕桜家ある人はとくかへる　（　同　）

一連の望郷句である。ここに詠まれた「桜花」は，「外は雪内は煤ふる栖かな」と詠んだときの「煤ふる栖」にも比すべき世界である。こういう「桜花」を心に思った人たちが，この時代どれだけあったかしれない。一茶はそういう人たち，都市への流出民の文化的頂点にあったと考えてよかろう。

《注》

（1） 山本健吉監修。大岡信・尾形仂・久保田淳・目崎徳衛編。1989。

（2） 全集本による。丸山一彦・小林計一郎校注。1980。

『北越雪譜』の刊は天保7（1836）。

同書に，「頸城の高田は海を去事遠からざれども雪深し。文化のはじめ大雪の時高田の市中町のながさしりにあまる雪に埋りて闇夜のごとく，昼夜をわかたざる事十余日，市中燈の油尽て諸人難儀せしに御領主より家毎に油を賜ひし事ありき。此時我塩沢も大雪にて夜昼を知らず。家雪にうづまりて日光を見ざる事十四五日連日ふぶきなるゆゑ雪をほることならず家うづまりてくらきなり人気欝悶して病をなすにいたれりもありけり。

百樹日，余牧之老人が此書の稿本に就て増修の説を添上梓の為に傭書へ授る一本を作るをりしも老人が寄たる書中に，「（略）此日次にては今年は小雪ならんと諸人一統悦び居候所に廿四日十一月なり黄昏より降いだし，廿五六七八九日まで五日の間昼夜につもる事およそ一丈四五尺におよび申候。（中略）駅中家毎の雪掘にて混雑いたし，簷外（えんぐわい）急玉山を築，戸外へもいでがたく悃り申候。今日も又大吹雪に相成，家内暗く蠟燭にて此状をしたゝめ申候（巻の1・雪の多少）。

およそ越後の雪をよみたる歌あまたあれども越雪を目前にしてよみたるはまれなり。西行が山家集，頓阿が草庵集にも越後の雪の歌なし。（略）俊頼朝臣に「降雪に谷の俤うづもれて梢ぞ冬の山路なりける」これらは実に越後の雪の真景なれども此あそん越後にきたり玉ひしにはあらず。俗にいふ歌人が居ながら名所をしるなり。（略）近来も越地に遊ぶ文人墨客あまたあれど，秋のすゑにいたれば雪をおそれて故郷へ逃帰るゆゑ，越雪の詩歌もなく紀行もなし（巻の2・芭蕉翁が遺墨）。

（3） 謡曲『葛城』は，これをそのまま引用して「笠は重し呉山の雪，鞋は香ばし楚地の花」といい，芭蕉も『虚栗』に「夜着は重し呉天に雪を見るあらん」と詠んでいる。

（4） 詳しくは，拙稿「望郷と回帰」――茶調の背後―『俳句とエッセイ』1983・2特集一茶）を参照されたい。

（1994. 12. 8）